

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	法学研究科	法学政治学 専攻
研究代表者 (2022年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年	ラウシュ 魁	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	法学研究科・教授	川崎 修	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	ハンナ・アーレントの政治理論-----大衆・モップ・人民に着目して-----		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2022年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	法学研究科・法学政治学専攻・博士 課程後期課程・1年	ラウシュ 魁	
研究期間	2021 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 100,000円 / (採択金額) 100,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、20世紀を代表する政治理論家の一人であるハンナ・アーレント (Hannah Arendt: 1906-1975) の政治思想において、従来あまり光の当てられてこなかった領域を取り上げ、それらの分析の上に彼女の思想を政治理論として再構築する試みである。具体的には、彼女の思想における、「大衆 mass」や「モップ mob」、「人民 people」などの人々の集合的カテゴリーに着目し、それぞれを入念に検討することで、彼女の問題意識、ならびに理想的な政治のあり方を考察し、これまで論じられてきたような「活動 action」や「公的空間 public realm」などのキーワードによる抽象的な理論に対し、具体的な政治理論として提示することを試みる研究である。

今年度は特に、「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念について検討した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ハンナ・アーレント] [デイヴィッド・リースマン] [大衆 (社会) 論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

上記の研究課題において、2021 年度に取り組んだ研究内容は、主として「大衆 mass」、あるいは「大衆社会 mass society」の概念の検討である。上記の研究課題において、今年度取り組んだ内容は、アーレントの思想を政治理論として再構築する際の、彼女における 20 世紀の現状認識の分析として位置付けられる。具体的に今年度取り組んだ作業としては、上記の「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念の形成に大きく影響を与えたと考えられる、20 世紀アメリカにおける著名な社会学者として知られるデイヴィッド・リースマン (David Riesman : 1909-2002) との関係について、さらにアーレントの亡命先であった 20 世紀アメリカという文脈の精査などである。

研究成果としては、主に以下の 3 点が挙げられる。

- ① アーレントとリースマンとの関係の精査。
- ② アーレントにおけるアメリカという文脈の考察。
- ③ 新たな研究の方向性・可能性の創出。

以下、それぞれの研究成果の概要を示す。

なお、上記の①、②の成果として、法学研究科 院生刊行紀要にて研究成果の公開を試みた。詳細は後述する。

① アーレントとリースマンとの関係の精査。

アーレントは 1940 年代後半、すなわち主著の一つに数えられる『全体主義の起原』の執筆をしていた頃に、20 世紀アメリカにおける著名な社会学者として知られるデイヴィッド・リースマン (David Riesman : 1909-2002) と書簡のやり取りをしていた。そこでは、アーレントの『全体主義の起原』の原稿や、リースマンの『孤独な群衆』の原稿に対するそれぞれのコメントや、大衆社会に関する議論が展開されている。この往復書簡については、2020 年度に立教大学 大学院 法学研究科に提出した研究代表者による修士論文「ハンナ・アーレントの大衆/大衆社会論」においても分析を行っているが、さらなる分析の余地があると考え、今年度も引き続き分析を行った。

同往復書簡について、2020 年度までは主にアーレントの視点から分析をしてきたが、今年度は、リースマンの文脈をも踏まえた分析を試みた。具体的には、『孤独な群衆』をはじめとするリースマンによるテキストを精読し、リースマンにおける問題意識などを加味した上で、再度往復書簡の分析を試みた。

リースマンの主著である『孤独な群衆』をはじめ、『群衆の顔』、『個人主義の再検討』に収録されている論文などの分析から、リースマンにおける大衆社会論なるものは、基本的に、集団主義 groupism、あるいは画一主義 conformism に対する個人主義 individualism の擁護の議論であることを読み取った。アーレントが往復書簡の中で、リースマンによるアメリカ大衆社会の記述に関心を持ったという点に関しては、上記の修士論文でも詳細に分析を行ったが、そのリースマンによる大衆社会や、そこでの画一主義がいかなるものであったのかに関する理解は、今年度の研究成果であると言える。

また、リースマンの『孤独な群衆』における分析概念である「他人指向型 other-directed」に関して、往復書簡においてアーレントがこの概念に関心を示し、さらに好意的に評価していたという点については上記の修士論文においても詳細に論じたが、リースマンの側においても、「他人指向型」とは、いわゆる“現代の大衆社会における画一主義的な人々”という典型的でネガティブな理解の他に、「他人指向型」の肯定的な記述も見出した。

以上、アーレントとリースマンの関係の精査として、往復書簡の分析におけるリースマン側の文脈の精査を行い、同往復書簡の理解を深めることができたと言える。

② アーレントにおけるアメリカという文脈の考察。

周知の通り、アーレントは 1933 年にナチ党が政権を奪取した際にフランスを経由し、1941 年にアメリカに亡命をしている。その後、1975 年に没するまでアメリカで過ごし、著作物も主に、アメリカにおいて英語で著していた。ドイツにおいて、ヨーロッパ哲学の洗礼を受けた彼女にとってアメリカとは文字通りの新天地であったことは疑い得ない。そうした中で、20 世紀における大衆社会の典型例としばしば考えられていたアメリカという土地は、彼女にとっていかなる問題を提起し、いかに思想形成に影響したのかという問いが、彼女の「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念を検討する上で重要な問題となる。

ここで検討したのが、2015 年に Richard H. King によって著された研究書『アーレントとアメリカ』である。同書は、アーレントにおけるアメリカとは何であったのかという問題について、彼女の思想と同時代のアメリカの文脈を照らし合わせて考察することによって議論を展開している。同書の精読、ならびに関連文献の講読により、アーレントにおけるアメリカという文脈の重要性について一定の見通しをつけることができた。なお、この点に関しては、次項で詳細に記述する。

研究成果の概要 (つづき)

①&②の成果として、書評論文(研究ノート)の執筆。

上記①、②の研究成果として、前述の Richard H. King による『アーレントとアメリカ』の書評論文を執筆した。同論文は、立教大学 法学研究科の院生刊行紀要である『立教大学大学院 法学研究』の 52 号への掲載を試みたが、応募原稿が十分に集まらなかったという研究科の事情により、今年度の刊行は 2022 年度に見送られた。そこで、4,000 字程度の書評論文として執筆した原稿を、『『アーレントとアメリカ』(Richard H. King)を読んで』と題し、20,000 字程度の研究ノートとして加筆・再構成し、来年度刊行予定の紀要への掲載を試みている。以下、その内容について概略する。

・書評論文の内容の概略：

前述の King による『アーレントとアメリカ』の内容を要約した上で、批評を行った。

具体的には、同書の全体を通じて議論されている「アーレントは果たしてアメリカ人となったのか」という問題提起に対し、各章の要約の上で、アーレントとその都度比較される“アメリカ的なもの”との距離感を検討した。著者 King による議論は、アーレントの思想を同時代のアメリカの文脈に落とし込んで検討しているという点評価できるが、その都度アーレントと比較されている“アメリカ的なもの”とは、果たしてアメリカ的と言えるのか、さらに、King が想定する“アメリカ的なもの”は措定され得るのかという疑問は残る。加えて、同書において King はアーレントの思想におけるアメリカ的要素を、共和主義の夢と大衆社会の悪夢というポジティブな側面とネガティブな側面の両方を指摘しているが、前者に関しては本書全体で言及され入念に検討されているものの、後者については、限られた章で論じられるにとどまり、包括的な検討が行われているとは言い難い。

・研究ノートとして加筆した内容の概略：

上記の通り、King による『アーレントとアメリカ』においては、アーレントにおけるアメリカ的要素として、共和主義の夢、と、大衆社会の悪夢という二つの側面があると論じられていたにもかかわらず、前者についてはほとんどの章で言及され、詳細に論じられていたのに対し、後者に関しては、限られた章でしか論じられていない上に、十分な分析が行われているとは言えない状態にあった。そこで、研究ノートとして加筆した部分では、King によるアーレントの大衆社会論の批評を行った。さらに、2020 年度に提出した修士論文「ハンナ・アーレントの大衆/大衆社会論」で論じた内容も合わせて、アーレントにおける「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念の包括的検討を行った。具体的には、アーレントには、ヨーロッパにおける階級社会の崩壊を論じた大衆社会論と、戦後アメリカの豊かな社会における大衆社会論という二つの議論が認められるという King の指摘に則り、それぞれに詳細に検討した。その上で、両者の共通点としての「見捨てられている状態」という概念についても検討し、議論を締めくくった。

なお、前述の研究科の事情により、上記の研究ノートは未だ紀要への掲載には至っていないが、来年度に刊行される紀要において掲載を予定している。

③新たな研究の方向性・可能性の創出。

以上、今年度は、修士課程での研究に引き続き、ハンナ・アーレントの政治思想の研究を行った。具体的には、アーレントにおける「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念の検討を行ったが、研究を進めていく中で、新たな研究の可能性に到達した。それは、大衆社会の概念を、アーレントの思想のみならず、20 世紀政治思想における重要な概念として分析することである。周知の通り、大衆社会論とは 20 世紀前半から中頃にかけて非常に大きな影響力を持った一連の議論を指しているが、1960 年頃には失墜してしまう。この現象それ自体が検討する価値があるという点に、今年度の研究を通じて認識に至った。

今年度まで取り組んだアーレントにおける「大衆」、あるいは「大衆社会」の概念の検討は、来年度以降に研究課題として設定する、「大衆社会論の政治思想史」の一部とし、より広い射程で研究を行い、20 世紀政治思想の解明の一つの手がかりとしていきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

- ① 来年度 8 月頃刊行の立教大学法学研究科紀要『立教大学大学院 法学研究』52号にて、研究ノート「『アーレントとアメリカ』(Richard H. King) を読んで」を掲載予定。